

異類婚姻譚の「異類の妻」と「異類の夫」

難波美和子

1. 問題点

人間と人間以外の生き物（異類：動物・植物・超自然的存在¹）との結婚についての物語を異類婚姻譚という。異類婚姻譚には、その語り手の社会における「人間」「動物」そして種々の「空想上の、および現実の生き物」に対する考え方が反映しているとみることができる。たとえばその社会では動物は動物に過ぎず、人間とは断絶したものと見ているのか、逆に人間もまた動物の一類であるとみているのか。あるいは超自然との交流の能力は人間と動物のどちらが優れているのか。天上の住人、地下の住人は人間とどのような交渉をもつことができるのか。昔話では、人間・動物・空想上の生き物が自在に交渉するよう見えるかもしれないが、その在り様は、昔話を語る者、聞く者の間にある無言の合意の範囲の中で行われねばならない。そうでなければ、物語は聞き手にとって断絶したものとなり、親しんで聞く楽しみは阻害されることになる。昔話を聞くことは、説教やニュースを聞くことのように信ずべきことや驚きを求めることとは異なっている。昔話の登場人物は荒唐無稽であっても、語り手や聞き手の日常の行動規範によって動かされている²。そこに聞き手は楽しみや共感を見出す³。したがって、異類婚姻譚においても、物語の展開は、聞き手の心理に抵抗を与えない形を持つように語られる。そのことは「ありそうな話である」という意味ではなく、「あり得ない話であるが、その展開・結末ならば、面白い」という形である。この面白さは、驚愕や異質さではない。

たとえば、西ヨーロッパ諸国で昔話として語られる「美女と野獣」(AT425⁴)のタイプにおいては、「野獣」は人間であることが明らかにされねばならず、日本の「鶴女房」(AT400)では、妻が異類であることが明らかにされねばならないのは、それぞれの世界観がそれを要求するからである。つまり、前者においては最初から動物が人間と結婚することは行われていないのであって、動物と人間との関係は拒否されている。後者では、動物は変身能力を持ち、人間と交渉し得るものの、区別されねばならない存在である。他の文化においても、それぞれに、異類と人間との関

係、つまり人間の異類に対する見方が異類婚姻譚の展開に反映しているのである⁵。

ところで、異類婚姻譚とは人間と「異類」の交渉の物語であると同時に、結婚の物語でもある。夫が異類であるか、妻が異類である、という通例の結婚と異なる点はあるが、幸福なあるいは不幸な結婚を物語ることに違いはない。異類婚姻譚に語られる結婚は、人間と異類との関係に仮託された人間の男女関係とみなすことができる。妻として、夫として、どのような異類が幻想され、希求され、忌避されるのだろうか。

以上の二点について、日本にとってもヨーロッパにとっても、文化的影響関係が想定されながら、異なる文化であるインドでは、どのように語られているかを記述してみる。

2. インドの異類婚姻譚の諸形式

インドの昔話は、地域の広さ、その文化的多様性と重層性を反映して、まことに多種多様である。そして異類婚姻譚もまた、多くの種類がみられる。この多様さの原因については、ここでは論じない⁶。ここで述べることは、多様さの現象面についてである。

昔話の収集はインドでも19世紀後半にヨーロッパの影響下に始まった。というよりも、東インド会社の吏員やその家族、キリスト教伝導者の手で現地民の文化の研究・紹介という形で始まり、やがて民族主義と結びついていく。現在まで収集は続けられ、昔話集の出版点数も多く、相当数が報告されているが、必ずしもインド全体を覆うほど充分ではない⁷。今後も体系的な研究を行うための収集を期待したい。

異類婚姻譚は、発端と結末をひとつひとつ区別して分類すると、ほとんど分類の意味がないほど細分化されてしまう。そこで、私は入手した昔話集の中から、異類婚姻譚および、異類婚を含む話を選び出し、異類の種類・性別、発端と展開について、以下のように形式化した。これは人間と異類との結婚に関わる部分についてのみ抽出し、配列したもので、探索や難題に関するモチーフの展開や繰り返しは除外してある。

F 妻が異類

- I a. 若者が動物と結婚する。 b. 妻が美女または超自然の存在とわかる。
- c. 妻が失踪する。 d. 夫が妻を捜しに行く。 e. 夫は妻を取り戻す。
- I' a. 若者が動物と結婚する。 b. 妻が美女または超自然の存在とわかる。
- c. 妻が失踪する。

- I” a. 若者が動物と結婚する。 b. 妻が美女または妖精とわかる。
 ※ I と I’ の妻は、超自然の存在（妖精や天の娘）である。I’ は I の夫の探索が脱落した形ではないかと思われる。これに対して I” の妻は動物の皮を被っていた人間であると語られる。人間となった妻はもはや姿を消すことはない。
- II a. 若者が見知らぬ美女と結婚する。 b. 妻が異類（超自然の存在）とわかる。 c. 妻が失踪する。 d. 夫が妻を捜しに行く。 e. 夫は妻を取り戻す。
- II’ a. 若者が超自然の女性と出会い、結婚する。 c. 妻が失踪する。 d. 夫は妻を捜しに行く。 e. 夫は妻を取り戻す。
- II” a. 若者が見知らぬ美女と結婚する。 b. 妻が異類（動物／超自然の存在）とわかる。 c. 妻が失踪する／死ぬ。
 ※ II と II’ は結婚の時点で妻が異類であるか否かが判明しているかどうかの違いであり、展開に違いはあまりない。また、I - b 以降とほぼ一致し、妻の失踪で終わることもある。II” は妻が害をもたらす超自然の存在と認定される場合であるが、必ずしも害を与えなくとも、動物であることは、この形式となる。
- III a. 若者が見知らぬ美女を捜し求める。 b. 若者は困難を克服し、美女を手に入れる。 c. 第二の女性が美女を殺し、入れ代わる。 d. 美女は再生し、偽の妻は殺される。
- III’ a. 若者が見知らぬ美女を捜し求める。 b. 若者は困難を克服し、美女を手に入れる。
 ※理想的な美女の話聞き、探索の旅に出る。樹木、もしくはその果実の分身である美女を手に入れる。III’ は III の植物の再生のモチーフが脱落した形と思われる。
- IV a₀. 動物が人間の養子となる。 a. 動物が人間の若者と結婚する。 b. 動物が人間となる。
 ※動物が娘と偽って育てられ、人間と結婚する。動物自身には何の力もないが、神が動物を哀れんで人間に変身させる。
- VI a. 人間が異類の子を生む。 b. 異類の子が成長し、兄弟を見返す。
- VII a₀. 望まれていた子どもが生まれる。 a₁. 父が異類と結婚する。 a₂. 子とその母（たち）は異類の妻によって追放される。 a₃. 異類の妻は成長した子を殺そうとする。 b. 異類の正体が明らかにされ、子は父に認知される。
 ※邪悪な継母と継子の物語である。

M 夫が異類

- I a. 動物が女性に求婚する。 b. 夫が超自然的存在であるとわかる。
c. 夫が失踪する。
- I' a. 動物が女性に求婚する。 b. 夫が超自然的存在であるとわかる。
c. 夫婦は異界で暮らす。
- I" a. 動物が女性に求婚する。 b. 妻の兄弟が動物の夫を殺す。 c. 妻は夫に殉死する。

※ I は結婚が此界でおこなわれた場合である。夫は妻を捨てて自分の世界に戻る。結婚が異界で行われる I' では結婚は成就する。しかし、人間の妻と異類の夫が此界を訪れる I" では、結婚は破綻する。

- II a. 見知らぬ男または不思議な男が女性に求婚する。 b. 夫が超自然的存在であるとわかる。 c. 夫が殺される。 d. 妻が死ぬ。

※ここでは超自然の夫は悪意をもつものとみなされており、妻の死を導く。

- IV a₀. 動物が人間の養子になる。 a. 動物が女性に求婚する。 b. 夫が人間であるとわかる。 c. 動物の皮が焼かれ、夫は人間になる。

※子どものいない人間に拾われた動物が人間と結婚する。動物は人間になったり動物になったりする能力を持つのであり、もともとが人間ではないと思われる。

- V a₀. 人間の夫婦に動物の子が生まれる。 a₁. 動物の子は兄弟と求婚の旅に出る。 a₂. 動物の子は兄弟に勝って妻を手に入れる。 b. 妻は夫が人間であることを知る。 c. 動物の皮が焼かれ、夫は人間になる。

- V' a₀. 若者が動物に変身させられる。 b. 女性が偶然、若者の変身を解く。 c. 若者と恩人の女性は結婚する。

※ V では動物の姿を持っているが実は人間である息子は、自分で人間になる力をもっており、動物の姿で他を欺くのであるが、V' では他者の悪意によって動物にされた若者は自分ではその魔術を解くことができない。いずれも妻となる女性によって救われる。

- VI a₀. 異類から人間の子が生まれる。 a. 人間の女性に求婚する。

※なぜ異類から人間が生まれるのかは、説明がある場合⁸も、ない場合もあるが、いずれにせよ、人間であり、人間の姿をしているので、異類婚が引き起こす混乱は起こらない。

この一覧を見ると異類婚姻譚で、妻が異類である〔F〕か夫が異類である〔M〕かという違いが、単なる性別の交換ではないことがわかる。〔F〕と〔M〕の形式は

発端と展開において、相互に対応していないのである。つまり主人公の（あるいは異類の）性別によって、起こりうる事態が異なることが要求されている⁹。

たとえば、人間が動物と結婚するという発端を持つ場合（Ⅰ-a）、〔F〕では動物が人間、または超自然の存在であったことが、一時的な別離¹⁰を体験するとしても、幸福な結婚という結末に結びつく。このことは、Ⅱでも同様である。だが、〔M〕では必ずしも人間の姿をとらないし、超自然の存在であることも結婚の成就とはならない。結婚が成就されるのは、妻が超自然の存在でもある動物の世界に同化する場合に限られる。

次に、人間が見知らぬ者と結婚するという発端を持つ場合（Ⅱ-a）は（これはその発端においては、異類婚であることは登場人物に対して明らかにされていないわけだが）、見知らぬ者が超自然の存在であるという点は共通するが、展開は対照的である。〔F〕では善良な存在であることが多いが、加害者であったり、中間的な存在でもあり得る。一方、〔M〕では超自然の存在は人間に害を与えるものである。

また、理想的な配偶者を捜し求める旅に出発するという発端（Ⅲ-a）は、現在手元にある資料の中からは、〔F〕にしか見られない。

動物が人間の養子となり、人間と結婚するという発端（Ⅳ-a）は、〔F〕の例は少なく、〔M〕に数多くみられるが、単に結末の相違だけでなく、動物の在り方そのものに明白な違いが見られる。〔F〕では特別な能力を持たない動物が神の恩寵によって人間に変身するが、〔M〕では動物自身が自由な変身の能力をもっており、積極的に行動する。彼は動物の皮を失うことによって、人間の姿に固定されるのである。

異類と人間との結婚の物語では、人間にとっての異類との結婚という意外な事態への対処が関心の中心となるためであろうが、語りの視点、行動の起点は男女を問わず、人間の側に置かれていることが多いが、Ⅴの場合は異類の側にそれが置かれている。これは、実は人間である異類がいかにも人間に戻るかという語りに関心の中心になるからだと思われる。

人間の夫婦に動物の子が生まれるⅤ-aの発端を持つ話は、〔F〕ではみられない。これはどうしても子どもが欲しい夫婦が呪術を行うが、それが適切でなかったために子が動物として生まれるというものである。こうまでして得たい子は男子であり、女子ではないということであろう。この点は〔F〕のⅣと比較できる。これに対して、人間の若者が他者（たいていは親族の女性）の魔術によって動物にされるといふⅤ'30-aの形式はヨーロッパの「美女と野獣」と比べることができるが、主要な違いは、動物にされた若者の側に視点が置かれていることだろう。いずれも最終的に人間の姿に戻るのには、妻となった女性による。

異類から人間が生まれるというⅥ-aの発端の形式は、雌の動物が生んだ子が人間である〔F〕ことと、人間の女性が異類の子を生むこと〔M〕というように、対応する。しかし、生まれた子の行動が主眼となるので、異類婚として語られることは稀である。〔F〕では子は完全に人間として生き、動物の母との関係はあまりない¹¹。とくに〔M〕では動物の精液が混じった水を飲んで人間の女性が妊娠すると語られはするものの、異類婚の意識はほとんど見られない。生まれるのは動物の姿の子だが、その子が人間と結婚するという話は稀である¹²。つまり異類婚姻譚とは言いにくい形式なのだが、ⅣやⅤとの比較の上で注目しておきたい。

Ⅶの形式は悪意を持つ超自然の存在が人間の男性と結婚するものであるが、Ⅱとは展開の上で異なっており、異類婚のモチーフを含むものの、邪悪な継母によって課せられた難題を解く継子の冒険の物語である。〔F〕にのみみられ、対応する形式は〔M〕にはみられない。

以上のように、〔F〕と〔M〕で対応する形式が存在する場合でも、展開や結末が異なる。次にこの相違を、異類の種類や性別から述べる。

3. 異類の種類と性別

異類の種類によって、展開と結末がどのように変わるかを分類したところ¹³、異類の種類は以下のように大別できるように考えられる。

- ① 超自然の存在（人間に特に害をもたささないもの：神，天女，妖精，精霊……）
- ①' 超自然の存在（人間に害をなすとされるもの：魔物）
- ② 超自然の動物（異界の支配者たる動物。鱷，蛇，象……）
- ②' 野生動物（野生の哺乳類，水棲動物，昆虫）
- ③ 家畜動物（ロバ，犬，家禽……）

①と①'は人間より遥かに強い力を持ち、異界に住みながら、此界との間を往来し、人間と交渉を持つ存在である。区別は明確ではないが便宜上、分ける。②は①と区別がつきにくいだが、此界では主として動物の姿であり、異界において人間の姿を持つ。②'は人間に変身することがあるが、本質は動物であり、住処は人間の住処とごく近く接している。そして②も②'も人間の力のもとに支配されることがなく、自発的に行動する。③は生存そのものが人間の力に左右されているものである。

このような異類の種類と、物語の諸形式との関係は、おおよそ次のようになる。

F 妻が異類

I ②' →①〔此界で暮らす〕

I' ②' →①〔別離〕

I" ②' →①〔此界で暮らす〕

II 人間→①〔此界で暮らす〕

II' ①〔此界で暮らす〕

②(失踪なし)〔此界で暮らす〕

II" 人間→①' /②'

〔別離, または異類の死〕

III ①(死→再生)〔此界で暮らす〕

III' ①〔此界で暮らす〕

IV ③→人間〔此界で暮らす〕

M 夫が異類

I ③→①〔別離〕

I' ②〔異界で暮らす〕

I" ②または②'

〔異類の死, 女性の死も〕

II 人間→①'

〔異類の死, 女性の死も〕

IV ②' →人間

V (人間→) ②' または③→人間

V' 人間→③→人間

VI (人間の母→) ②' 〔結婚はなし〕 VI (人間の父→) 人間

VII 人間→①' 〔異類の死〕

次に上の一覧から、異類の種類と性別が物語の展開と結末にどのような関係を持つかを述べてみる。

①の女性は極めて美しく、特殊な能力を持っていることの外は人間の女性と変わることはない。人間の夫は一時は妻を失うが、妻の親族から(あるいは神から)改めて許しを得ることで、結婚を成就する。植物の霊である女性では死と再生を通過するが、女性の本来の世界への一時的な失踪と帰還とみなすならば、天の女性の失踪と再獲得と同様な手続きであるといえる。この結婚生活はふつう、此界、つまり夫の世界で行われる。二度目の、そして恒久的な結婚の後では、妻の超自然な性格は多くは消失してしまい、人間の世界に統合されているようである。これは幸福な結末とみなされる。

①'の女性は、美しい女性であると当初は見られるが、後に正体が暴かれると、醜い、あるいは恐ろしい容姿であると語られる。夫に対し、悪意があると暴くのはたいてい第三者で、退治する方法も教える。しかし、彼女たちの故郷である異界は、①の女性たちが住む異界と同じように、人間の世界にはない不思議な力を持つ宝を有していて、人間の世界にこれをもたらすきっかけにもなる¹⁴。①と①'の相違は正確に述べることは難しく、当の女性に悪意があるか否かだけである。女性の親族のほうはいずれの場合も人間に悪意を持っていることが多いのだから。そこに住む

女性たちは人間の男たちへの誘惑と拒絶の二面性を現して、愛情を与えることもあれば、悪意を剥き出しにしもする。この二面性は人間の女性に対する評価でもあろう。

①の男性が人間の女性と結婚する話は、神話や伝説と異なり、意外にも稀である。①の女性に近い性格を持つ男性と結婚する女性の物語はかなりののだが¹⁵、彼らは天上的な存在であると語られることはない。不思議な性質にもかかわらず、彼らは神でも妖精でもなく、住む土地も異界ではなく、人間たちの国である。

異界の住人である男性は①'とされてしまうようだ。神であるとはっきり語る①の例でも、人間たちに災いをもたらしている。異界の男性は異界の女性と異なり、人間の世界に災厄を与えるもの、と見られている。そして①'を完全に排除した(死)ところで物語が終わるのではなく、①'と関係した女性をも排除してしまうのである。

こうしたことから、人間にとって、超自然的な異界は非常に不思議な宝を有する場であると同時に、人間を拒否する場所でもあるようだ。しかも人間の世界にとっては脅威でもある。異界からの訪問者も人間にとって脅威であるが、そこには人間にとって価値あるものがある。それを獲得して帰還すれば幸福が約束される。異界の女性が一度は夫から失われねばならないのは、この異界の脅威を排除する働きからではないだろうか。そして妻が異界へ帰る原因を作るのが夫であるのに対し、夫を排除しようとするのが妻よりも妻の親族であることを注意しよう。異界の住人が人間の夫を排除しようとするように、此界の住人は異類の夫を排除しようとする。

②の女性は、親族は動物であっても動物の姿を持たないように語られる。動物の世界で結婚し、人間の夫の世界にやって来る。彼女はずっと人間の姿であり、また動物たちへの支配力を持っている。つまり、本来の世界との関係を絶たないで、此界で暮らしている。一方②の男性は、此界に現れ、求婚するときは動物の姿である。多くは恐ろしい動物、たとえば大蛇、コブラ、鰐である。猿はたいてい③のように思われるが、②であるかような例もある。②の男性と結婚した女性は、恐れながら夫の世界へ赴く。しかし、異界では夫が人間の姿を持つことがわかって安心する。そして異界で幸福に暮らす。異界での生活が語られない場合、視点は女性の家族の上にある。女性が里帰りをすると家族たちは、彼女を連れ戻そうとして、異類の夫を殺す。そして妻は夫とともに死ぬことがある。

②'に含まれるのは、雑多な動物である。②と違うところは人間世界のすぐ側に、混じり合う所に、個々に暮らしていることといえる。②'の女性は人間の姿で、あたかも人間か①の女性のように人間の男性の前に現れる。しかし、②'であると知れると元の姿になって去っていく。反対に②'として結婚する女性は、①の女性も

しくは人間であるとわかる、という逆の展開をみせる。

②'の男性が人間を装って人間の女性と結婚するという話は少ない。たいていは②'がまず人間の養子となり、次いで人間の女性に求婚する。その後、人間の姿と動物の姿とを自由に交換しているが、動物の皮を妻が燃やしてしまったため、人間の姿で暮らすことになる。彼らの真の姿はどちらなのであろうか。ヨーロッパの童話でみられるような、最後に魔法にかけられていたと、種あかしすることはあまりない。このことは、語り手たちが、彼らは本来、動物であって、変身の能力を持っているとみなしている、と考えられよう。

①～②'の異類は本質的に異類であるが、③はどうだろうか。③として登場する女性は本来動物であるが、人間に変化してしまう場合と、魔法で③に変身させられるが、もとに戻る場合がある。後者の場合は異類婚姻譚とは言いにくい。前者で注目されることはペットの鳥、猫といった動物は②'とは違い、自分で人間の姿を取ろうとしないことである。彼女らは他の力を頼るほかはない。

③の男性では、本来③であったという例はみられなかった。いずれも他者の悪意や魔術の失敗によって変身させられている。懐妊の魔術の失敗¹⁶によって動物に生まれることは動物に変身させられるとみてよいだろう。この話ではその種類はたいてい③の範疇にはいる動物である。犬、豚、鳥では孔雀や鸚鵡である。猿という例もあるが、猿は他の話型からしても、神話的な神通力をもつ超自然の動物とも、野性の力をもつ動物とも、ペットの動物ともみなされる境界上の動物のようである。彼らは自分の力で変身したのではないだけに、自分でもとの姿に戻ることはできない。結局、他者の力つまり妻となった、あるいは妻となることになる女性によって魔法を解いてもらう。

このことは②や②'と異なり、③(家畜)には変身の能力があるとは思われていないのだ、ということをおぼせさせる。変身の能力はいわば「自然がもつ力」であって、自然力そのものである「超自然的存在(矛盾した言い方であるが)」と自然霊である「異界の支配者としての動物」たちはもちろん、人間の支配を受けずに自然の中に生きている「野生動物」もこの力を持っている。これに対して、人間はどうやらこの力を生まれながらには身につけてはおらず、学習することによって身につける¹⁷。その人間に生存を支配されている家畜は自身にはその力がない。ところが人間が人間によって変身させられるときは、主として家畜にされる。人間には野性動物に変身する能力がないらしいのである。

4. 異界と此界の往来

異類婚姻譚の中で異類たちは、人間の前に現れ、人間の社会に統合されたり、あるいは殺されたり、再び去って行く。その結末、人間の社会に同化するか、排除されるかは、異類の種類と性別によって異なっていて、全く自在に結末がつけられるのではない。分類し、小さな要素や交換可能と思える要素を記号化してみると、異類の種類と性別は結末に影響を与えているといえる。

上にみてきたように、超自然的存在は人間にとって危険であるが、女性は人間界に同化され得る。一方、男性は排除される。超自然的な、異界の住人である動物では、女性は異界の支配力を保持したまま人間世界に同化し、男性は異界に人間の妻を伴った場合は幸福な結末になり、人間界に来ると殺されてしまう。超自然的存在の男性と比較してみて、こうした強い力をもつ異類の男性は、人間の社会に同化することが許されないようだ。逆に女性は、一定の手続きによって人間界に同化することが許される。許すのは異界の住人であろうか、此界の人間であろうか。異界の女性の此界への移動の手続きに、異界での結婚の許しが必要であると見えることからして、双方の要請であると考えられる。それは実際の結婚の手続きと同じである。インドの多くの社会では、結婚式は女性側で行われ、花婿は花嫁を伴って帰還する。妻は夫の家に入り、夫が妻の家に入ることはない¹⁸。妻の家、そして妻の属する社会に入り込もうとする夫は、事実としてはともかく、心理的に排除されるのだろう。

このことがなぜ、野生動物の男性が人間の女性と結婚し、人間の姿になった場合に受け入れられるのか、ということの説明しようとしたときに関わってくる。超自然的存在（人間の姿のものであれ、動物であれ）はあくまでも異界の住人であり、人間の社会にとっては異質で危険なものでありつづけるが、野生動物の場合、皮を焼かれてしまうことにより、動物としての性質を全く失ってしまう、つまり完全に人間になる。もはや異類ではないのだから、人間に危険を及ぼさない。そして、重要なことは、これらの動物は、人間の女性に求婚する前に、人間の養子になっているのである。彼らは人間の社会に帰属する場所を持っていて、妻の家族内に、血統として侵入しないことになる。人間の社会制度を破壊しないのである。従って、人間の社会に同化することを許される。反対に野生動物の女性は動物の姿を失わず、動物の姿を見顕わされることで、人間の社会から排除される。動物の皮を脱いだ女性は超自然的存在とみなされて物語を次へ発展させることもあるが、そこに働いている心理は異類の排除と同じであろう。どういう理由でか、人間の養子となる野生動物は男性に限られている。やはり「必要な」子どもは男子ということだろうか。

養子にされた動物が女性である場合、その動物は家畜の範疇にはいる。動物であ

ることを隠さなければならないという理由で、娘であるとして周囲を欺くのである¹⁹。家畜が男子として養子になる例はないようである。「存在が偽られた子」(AT459)では男子であることもあるが、その場合動物の養子ではなく、人形によって周囲を欺く。状況からして家畜でなければならないとしても、なぜ男子では避けられるのか。人形も、結局他者(神)の力で人間になったり、代わりの子どもが連れて来られたりするという事を考えると、敢えて家畜が人間になり、夫となることが回避されているのではないかと考えられる。家畜とは人間の支配を受けているものであるから、人間(女性)に対して権威をもつ存在にはなるべきではないという心理が働いてはいないだろうか。

家畜の範疇に入る動物が人間の女性の夫となる話では、その動物は実は人間であって、魔術によって動物の姿に変えられているのである。家畜は人間になる能力を持っていないということでもある。このとき、妻によって変身が解かれることも、社会的意味を反映していると思われる。未成熟な存在であった若者が結婚によって社会的地位を与えられる、社会の構成員となる。子どもという、成人社会からは異質な存在から、社会に同化したわけだ。動物の姿をとっていた女性についても、また人間の養子となる野生動物についても、同じことがいえる。

この他、人間の社会制度が異類との交渉に反映していると考えられる例がある。1節でⅥに分類した、動物と人間との間に生まれた子どもでもある。この子は異類婚姻譚といえる交渉から生まれたのではないし、父に知られることなく、それぞれの母の住家で生まれる。それでも、子は父の姿を受け継ぐのである。母が人間であっても、父が動物であれば動物の姿をとり、父が人間であれば、動物の母から人間の姿で生まれる。このことは、子は父に属するのだ、という思想を現わしているといえるだろう。

このように、異類婚姻譚において、物語の展開に登場人物の種類と性別が規制を与えているだろうことが推測されるのである。どのような力が昔話の語り手に、幸福な結末や、死や別離といった不幸な結末を選択させるのか。その力が、その文化が持つ世界観、人間と異類の関係はこのようであると、語り手に思わせるものだろう。だがそれは宗教教義と異なり、明示することはできないし、かなり広い幅を持っていると思われる。しかも共通の文化基盤を持っていても、地域が隔たり、自然や、影響を受ける外来文化が異なれば、その感覚も異なってくるだろうことが想像される。

本稿で扱ったインドの昔話は北部インドを中心に東部インド、西部インドおよび中部インドまでを含む広い範囲に及ぶ。したがって本来ならば、言語、文化の相違

に配慮を加えなければならないところを、大きな枠組みで分類した。地域によっては語られない形式もあろうし、また異類の種類分類にしても、別の範疇が適用されるべきかもしれないし、もっと細分化が必要な場合も、あるいは少ない分類でこと足りる可能性もある。しかし、この分類法でも、男女関係による展開と結末の相違や、いわゆる天人女房と動物女房の場合の差異を説明する一例になりうるのではないかと思う。

注

1. 超自然的存在とは、いわゆる生物学の分類上は認められない人間の創造力が生み出したとされる生き物のうち、とくに人間と何らかの形で交渉をもつものを超自然的存在とした。本稿ではその中でも、異界を本来の住居とし、人間の姿を持って異界と此界を往来するものをさす。
2. もちろん、ふつう許されない行動をする主人公もいる。ただ、それは考えられないものではなく、あるべき行動の正反対をするということで、想像の外にあるものではない。語り手や聞き手にとって、違和感よりも笑いを呼び起こすものだろう。
3. 小沢俊夫『昔ばなしとは何か』福武書店1990（大和書房 1983）
4. フィンランドのFolklore研究者A.Aarneによって行われた昔話の話型分類を、アメリカのS.Thompsonが補訂した。両者によって分類された話型をATで示す。
A.Aarne and S.Thompson, *The Types of the Folk-Tale* (FFC no.74; Helsinki, 1928)
5. 小沢俊夫『世界の民話 ひとと動物との婚姻譚』中央公論社 1979、『昔ばなしとは何か』福武書店1990（大和書房 1983）、後藤優『人と動物の愛と結婚 民話による東西文化比較考』原書房 1981、中村禎里『日本人の動物観—変身譚の歴史—』海鳴社 1984、などを参照。
6. インドの昔話の多様さの原因を論じるためには、歴史的背景の他に、面積と言語数においてヨーロッパ全土に匹敵するインドを、一括して一つの文化圏とみなすことの問題から論じなければならない。
7. Ramanujan, A.K. (Ed. B.E.F.Beck, P.J.Claus, P.Goswami, J.Handoo, *Folktales of India*, Chicago and London, 1987)
8. 人間の男性の精液が混じった水を動物の雌が飲んだ、という説明がなされる。このモチーフは、仏典を通じて日本に入った「一角仙人」にも見られる。
9. 日本の異類婚姻譚における異類の性別と結末に関する構造主義てき分析については、兩宮裕子「異類婚の論理構造」『関敬吾博士米寿記念論文集 民間説話の研究—日本と世界』同朋社 1987、を参照。

10. 夫がタブーを破ったことにより、妻が異界に帰ること。
11. 父が子を認知し、次いで母である動物が変身した女性と結婚するという話が、現在のところ一例が手元にある。
12. 人間の女性から動物の排泄物を通じて生まれた子が人間になる話はⅣに類するものが一例ある。その他は、人間の兄弟や親族との葛藤がテーマである。
13. 筆者『インドの昔話にみられる異類婚姻譚の諸相』（修士論文）第三章 インドの異類婚の構造
14. Ⅶの形式では、異類の継母に異界へ旅立たせられた若者は、異界から異類の宝石や素晴らしく美しい衣装、魔法の牛や、豊かな収穫を約束する穀物を持ち帰る。
15. 死者または死者と思われる男性と結婚する女性。あるいは不思議な扇や箱の中から現れる若者と結婚する女性。彼女たちはタブーを犯して夫を失い、探索の旅に出て、ついに夫を取り戻す。しかし、この夫たちは、人間の男性が妻とする天女や妖精のように、異界の者とは語れないのである。
16. 子どものいない王が、行者などの教えにより、妻たちに果物などを与える。最も若い妻は平等な割当をもらえない。全ての妻が子を生み、最年少の妻は動物を生む。
17. 以前、インドの昔話に現れる変身を調べたとき、人間の変身を語る場合、多くは変身の方法を学ぶことが語られていることに気づいた。
18. 母系制で有名なナヤール族でも、夫は妻の家の一員にはならない。
19. 子どものいない王が、子どもを生まなければ殺してしまうと妻たちを脅すので、妻たちは、子どもが生まれたことにして、動物を育て、成長するまで父親が見てはいけないうことにする。